

Vol. 22 No. 3 (No. 278) 2012. 11. 30

東洋英和女学院大学図書館

展示ケース「黎明期の女性雑誌」



エントランスホールの展示ケースでは明治・大正期に発行された女性雑誌の復刻版を中心に展示しています。明治・大正期には多くの女性雑誌が発行されては消えていきました。高い志を掲げて創刊された雑誌であっても短いもので1年以内に消えたものもあります。明治23年に博文館から発行

された「婦女子」は1号で終わっていますので、定期刊行物としての雑誌とは言えないかもしれません。

明治10年代から大正期に発行された女性雑誌はなんと327種にもなります。そのうち本学図書館で所蔵している最も古いものは今回展示している「以良都女」(いらつめ*) (明治20年創刊)です。「以良都女」は創刊当時、良妻賢母的な女性を理想とする保守的啓蒙雑誌でしたが、原文一致運動を提唱した作家、山田美妙が編集にかかわるようになってから、文芸雑誌の特色が色濃くなってきました。このように女性雑誌といっても、実際は男性編集者の個性によって編集方針が決定づけられていたといえます。

その一方で明治36年に創刊された「家庭の友」は「婦人之友」とタイトルを変えて現在も発行されています。何と来年で創刊110周年！頭が下がります。女性雑誌には、文芸、家事、ゴシップ、生き方など、現代と変わらない女性の悩み、問題、興味などが詰まっています。また女子教育が普及されるとともに、新しい知識や、女性としての人権を求めていく世相も知ることができる第1級の資料ともいえます。ぜひご覧ください。

参考文献 浜崎 廣著「女性誌の源流」 出版ニュース社 2004 (図書館所蔵 051.7H26)

*"いら-つ-め【即女・即姫】" 上代、女子に対する親愛の情をこめた称。いらつひめ。

日本国語大辞典、ジャパンレッジ (オンラインデータベース)、入手先<<http://www.jkn21.com>>, (参照 2012-11-22)

図書館・メディア・コミュニケーション研究所共催連続講演会 「活字の世界を楽しむ」

第1回目は中沢けいさん（作家・法政大学日本文学科教授）をお招きして、「書籍は情報ではない」と題した興味深い講演をしていただきました。当日の講演をお聞きになれなかった方のために紙上で再現します。



まず書籍と電子テキストは同じものかということについてお話しします。本という言葉は広い意味で使用することが多く、雑誌や小冊子も含まれることがあります。今回は文学作品を取り上げるのであえて書籍という言葉を使います。最近は電子ブックへの新規導入もすすんでいます。が、「国歌大鑑」のような大部のものは別として単体の電子ブックは普及しないのではないかと考えています。映像や音楽が利用できる端末があるのに、電子ブックだけが見られる機器をどの程度利用するのでしょうか。

書籍は電子テキストとある意味で対局にあるものです。それは書籍が1冊ごとの独立したモノであるということです。書籍は段階を追って完成していきます。文学作品はまず雑誌発表することが多い。そのあと単行本という形で独立したものとなり、そのあと文庫本になっていきます。このプロセスの中で、作家にとって作品が完成するのは単行本になった時点だと考えています。

創作を勉強する人は本の部位、大きさにも意識を働かせてほしいですね。単行本は作家だけではなく装丁家、挿画家、編集者、印刷所など作者以外の人に関わりそれぞれが自分の本という認識を持っています。現在は作品をネットにアップすることが多く、全世界の人に見てもらえるというメリットがある。さらに作品を発表するのに費用が掛からない。いつでもだれでも、早く発信したり受けたりすることができるのもメリットといえます。

電子メディアは情報としての価値は高いのですが、情報は日々変化していき、簡

単に改変が出来てしまうという特徴があります。これに対して書籍は単体で、かつ独立して存在しているため、一度完成すると簡単には改変できないという特徴があります。ただし以前、活字を組んで印刷していたころと比べると、パソコンで印刷編集ができるようになり、これによって書籍であっても刷りによって内容やページを変えることがあります。ただ、印刷体としてはまだまだ電子よりも書籍は固定化されていると言えます。

まとめると情報とは、刻々と変わるものであり、わかりやすさ・伝わりやすさは問われるが、美醜はあまり問われない。それに対し、文芸作品は美醜が重要な要素であり、作品全体のフォルムによって伝わるものがあると考えます。装丁や表紙、その手触りや活字などから伝わることもあります。本は独立した世界を持つものであり、固定性が高く、改変しにくい、「書籍は情報ではない」というタイトルの意味もその辺りにあります。

最後に皆さんへの宿題として、テレビが普及しているのに映画がなくなるのにはなぜか、ぜひ考えてみてほしいと思います。

(2012年10月18日講演 文責：鷺谷)

与那覇先生から中沢けいさんのご著書を紹介していただきました。書籍の世界でも雑誌と単行本、また文庫本でも内容を変えてしまうことがあるそうです。発行する形態や刷りによって結末が違う小説が存在することを知っていましたか？

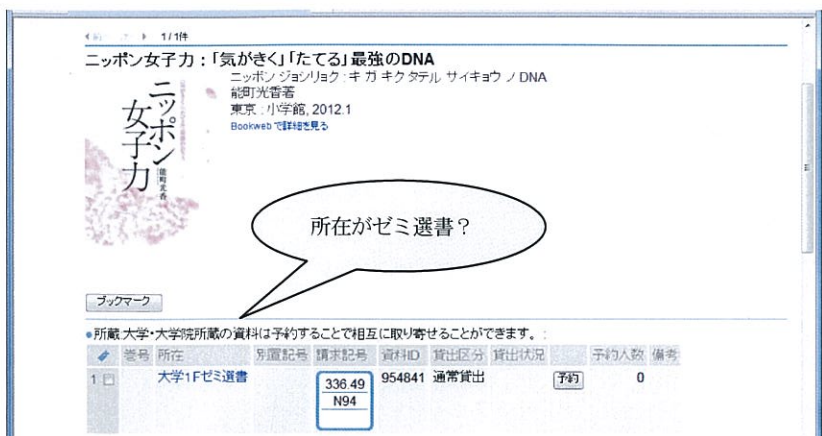


中沢けいさんの著書「楽隊のうさぎ」は単行本と文庫とで表紙が違います。

単行本は渡し守とウサギの行列を描いていますが、文庫本は中学校の吹奏楽部の絵に変えました。その途端に中学生の感想が爆発的に増えたそうです。図書館では文庫本を所蔵しています。(B2F 電動書架(図書) 913.6||N46K)

ゼミ選書って何？

「OPACで検索したら所在が『大学 1F ゼミ選書』となっていました。
請求番号の棚にはないのですが・・・」



これは 1F のゼミ選書コーナーにあります。
ゼミ選書コーナーはリザーブ図書コーナーの
後ろの低い書架にあります。
すこしわかりにくいので 1F 階段そばに
案内板を出しました。

ゼミ選書ツアーとは先生と学生がゼミのテーマや学習に役立つ本を書店の店頭で選ぶことを指します。

ゼミ選書ツアーによって選んだ本は、図書館の蔵書との重複チェックや、予算の確認を経てから図書館に納品されて、整理します。

晴れて図書館の蔵書となった本はその年度内はゼミ選書コーナーに配架されています。

該当ゼミの学生だけでなくどなたでも利用することができます。

編集後記

図書館をもっと知ってもらいたくて発信を続けています。

図書館は進化し続けていますので、今まであまり利用しなかった方も、いま図書館で何が起きているのか見にいっしょにしませんか。

(編集担当：鷺谷)